

特244

151

新本

日英交通の研究に貢献せし幕末及明治時代の
日英交通史上の三英國外交官



0010405000

0010405-000

特244-151

日英交通の研究に貢献せし幕末
及明治時代の日英交通史上の三
英國外交官

武藤長蔵・著

武藤長蔵

昭和13

ABJ

第六編 日英交通の研究に貢献せし幕末及明治

時代の日英交通史上の三英國外交官

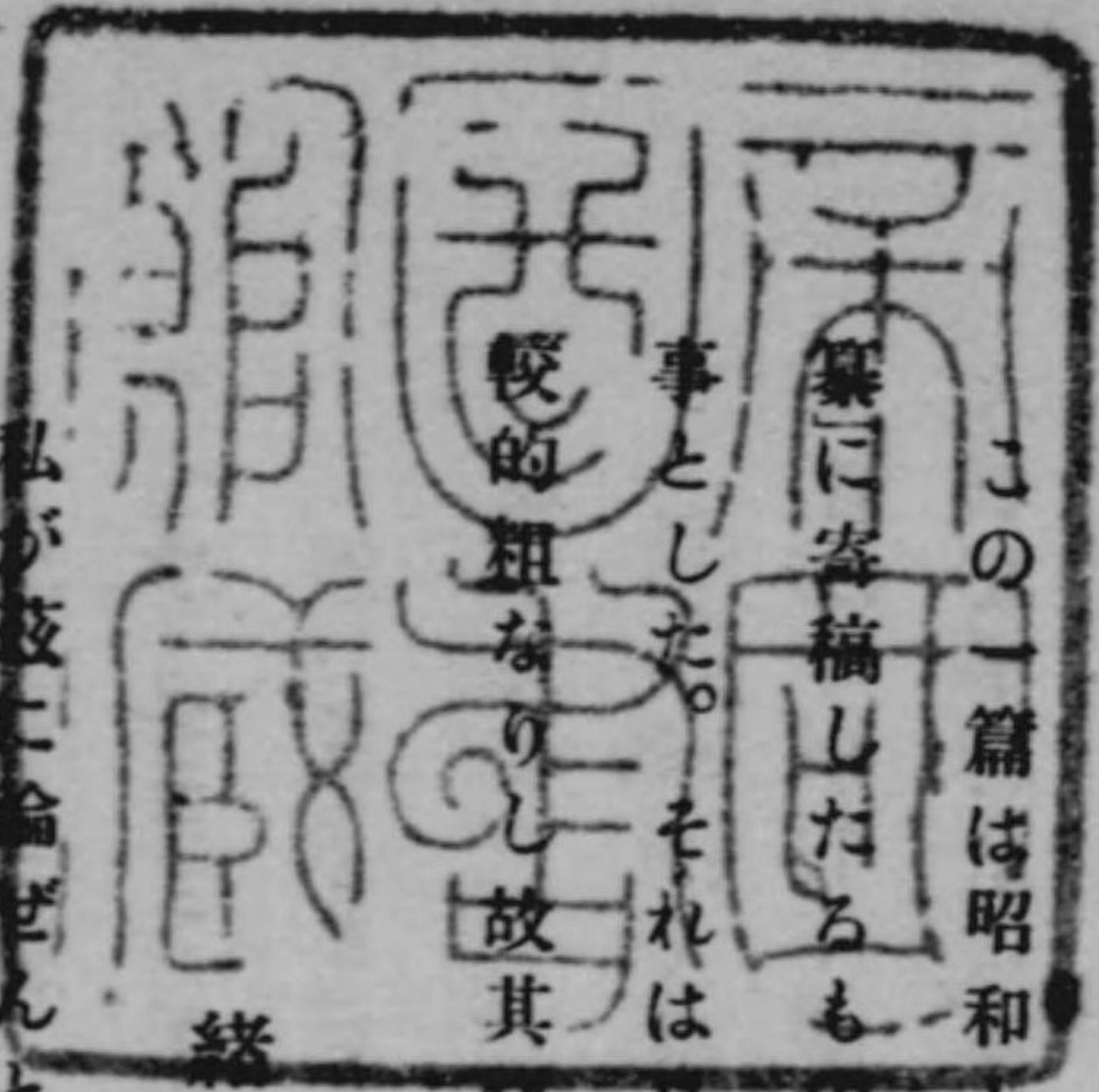
この一篇は昭和十二年十一月三日發行明治聖徳記念學會設立二十五周年記念論文日本文化史編纂に寄稿したるものなるが今同會の承認を得多少加書訂正してこの書の第六編として茲に掲ぐる事とした。それは日英交通史之研究が初期に重きを置き幕末及明治時代は史料の部を外にして比較的粗なりし故其缺點を少しにても補はんとの微意に外ならない。

緒論

私が茲に論ぜんとする幕末及明治時代の三英國外交官とは(1)ミットフォード(2)アストン(3)サトウの三氏を指す即ち原氏名と其生存せし年を年長者よりの順序にて示さば次の如くである。

- 1) Algernon Bertram Freeman Mitford (Lord Redesdale) (1837—1916)
- 2) William George Aston (1841—1911)

日英交通の研究に貢献せし幕末及明治時代の日英交通史上の三英國外交官



3) Sir Ernest Satow

(1843—1929)

我日本に來朝せし順序より云へば(1)サトウ氏(2)アストン氏(3)ミットフォードの順位となる。即ち次の如くである。

1) Sir Ernest Satow (1843—1929) 1862 (文久二年) 來朝

2) William George Aston (1841—1911) 1864 (元治元年) 來朝

3) Algernon Bertram Freeman Mitford (Lord Redesdale) (1837—1916) 1866 (慶應二年) 來朝

最年長者リーゾデール(Lord Redesdale) 即ち Algernon Bertram Freeman Mitford (1837—1916) はイートン(Eton) 牛津大學クライストチャーチ(Christ Church, Oxford) 等に學び西曆千八百五十八年英國外務省に入り千八百六十三年駐露三等書記官(3rd Secretary of Embassy, St. Petersburg) となり次で千八百六十五年北京に轉勤し西曆千八百六十六年九月駐日英國公使館二等書記官(2nd Secretary of Legation) として我國に來任しサトウ氏(Ernest Mason Satow) より日本語を學んだ。ミットホード氏(Mitford) は語學的才能の豊かな人で十二ヶ月にして日本語に通ずるに至つた事はサトウ氏を驚かして居る。サトウ氏の著述日本に於ける外交官(A Diplomat in Japan) に次の如く書いて居る。

It is a remarkable proof of Mitford's linguistic powers that he was able to carry on the conversation in Japanese entirely unaided, although he had been in the country no longer than twelve months. (A Diplomat in Japan

by Sir Ernest Satow, Chapter XXVIII: Downfall of the Shogunate, p. 285)

前述の(1)ミットフォード氏に次ぐ年長者(2)アストン氏(William George Aston) (1841—1911) は愛蘭のベルファスト(Belfast) の Queen's College に學び古典的語學にて金牌受賞者(Gold Medalist) 又近代語學にて名譽ある成績を得て B A 及 M A の學位を得千八百六十四年駐日英國公使館の通譯生(Student Interpreter in Japan) として來朝した。

彼は後に Interpreter and Translator to Legation となつた。彼の後年の著述によるも彼は語學的教養及才能を持つて居つたと見て差支ないと思ふ。

三人中最も年若き(3)エルネスト・メーソン・サトウ(Ernest Mason Satow) 氏は西曆千八百六十一年八月 Student Interpreter at Yedo に採用せられ十一月英國を出發し先づ支那北京に學び次で翌千八百六十二年日本に來た。顛末はエルネスト・サトウ氏著「日本に於ける一外交官」(A Diplomat in Japan) 第一章 Appointment as Student Interpreter at Yedo (1861) 第二章 Yokohama Society, Official and Unofficial (1862) に書いてある。

サトウ氏亦日本語に精通し其他の語學にも通じ優れた語學的才幹のあつた事は後に引用する Dr. shop Gore の讚辭にも明である。(The Rt. Hon. Sir Ernest Satow: A Memoir by Bernard M. Allen, London 1933. Epilogue の結尾参照)

此の如く三人共に語學的才能の豊かな人々で彼等が外交官を志したのは確に其長所を自ら意識的か又は無意識的に自覺したものでよく其職業の選擇を誤らなかつたものであると私は思ふ。私はかゝる優れたる外交官を幕末及明治時代に有せし事を英國の爲めに祝すると共に對手國であつた我國の爲めにも賀する次第である。

彼等の優れたる語學的才能は獨り外交上の事務に大切であつたのみならず日本語、日本文學、日本の宗教、日本の文化を英國に否世界に紹介するに如何に貢献せし乎。これ等三人の外に明治時代の初め即ち明治六年に齡二十三歳にして來朝されしバシル・ホオル・チェンバレン先生 (Basil Hall Chamberlain) (1850—1935) があり、日本語言語學者として最も優れアイヌ語、琉球語等に就ても學術的研究をされた。

又古事記の研究もされた。〔Translation of "Ko-ji-Ki" or "Records of Ancient Matters" by Basil Hall Chamberlain Second Edition with Annotations by the late W. G. Aston, sometime Japanese Secretary to the British Legation, Tokyo, Published with the permission of the Asiatic Society of Japan, Tokyo, by J. L. Thomson & Co. (Retail) Ltd., Kobe 1932〕 (最初 Transactions of the Asiatic Society of Japan. Vol. X Supplement, Tokyo 1906 に掲載)

又日本事物志 (Things Japanese, Being Notes on Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others) 其他を著せられた。しかし先生は外交官ではなかつた。故に茲には省いた。

尙又國際文化振興會にてバジル・ホオル・チェンバレン先生追悼記念録 A Bibliography of the Works of the Late Prof. Basil Hall Chamberlain (1853—1935) を發行し諸家の追悼の辭、思ひ出話、講演等發表せられたから茲には略してもよいと思つた。

チェンバレン氏はまた明治時代に入りて來朝せし學者であつた。この點でも幕末より來朝した、サトウ・アストン、ミットフォードの三人の外交官と異つて居る。またチェンバレン氏は政治外交とは關係がない。日英間の政治的外交的又通商的交易と關係がない。この點茲に論ぜんとする三外交官と異つて居る。

チェンバレン先生 (B. H. Chamberlain) が Wasubiyauwe, The Japanese Gulliver と題し Transactions of the Asiatic Society of Japan Vol. VII. Pt. IV (1879) に寄せられた研究に就ては本書初版第五編第七百三十八頁以下第七百三十九頁に書いて置いた。アストン (Aston) 氏著日本文學史 (A History of Japanese Literature) は馬琴 (Bakin) の夢想兵衛胡蝶物語 (The Musobioye Kocho Monogatari) はそれよりも舊き別人の作和莊兵衛 (Wasobioye) より其思想 (The Idea) を借りたるものなる事を指摘しては居るが Swift の Gulliver's Travels とは比較しては居らぬ事をも本書初版第七百三十七頁中に述べて置いた。

本論

さて本論に入り幕末及明治時代の三英國外交官サトウ、アストン、ミットフォードの三氏に就て其渡來の順序により述べて見る事とする。

第一節 サ・エルネスト・サトウ (Sir Ernest Satow) (1843—1929)

(Ernest はフーニストと英語にも發音されど自身にてエルネストと假名に移されし事ある故それに従ふ)

“He was a scholar of rare distinction, not in Japanese only but in Latin, Italian and Spanish, and his knowledge of English literature was wide and discriminating. He was also a deeply religious man, with a great understanding of the principles of the religious life.”

：“A Great Far Eastern Diplomatist”

By Bishop Gore (The Times, August 27th, 1929)

The Rt. Hon. Sir Ernest Satow G. C. M. G. A Memoir by Bernard M. Allen, M. A., L. L. D. London 1933 12頁

I. Early Days in Japan (1862—1869)

II. Scholar and Diplomat

1. The New Japan (1870—1883)
2. Siam, Uruguay and Morocco (1884—1895)

3. Minister in Japan (1895—1900)
4. Minister in China (1900—1906)

なるシステムにてサトウ氏の生涯を區分して説明して居る。

彼の著述に就ては前述 Allen 氏の著述の卷末附録 (Appendix List of Writing of Sir Ernest Satow) に列擧されて居るが私も本書第二編日英交通史料中日英交通史料(一)(2) The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613. Edited from Contemporary. Recorded by Sir Ernest M. Satow London: Printed for the Hakluyt Society, 1900 を掲げて置いた。これ初期日英交通史の最も重要な文献である。ジョン・セーリス (Captain John Saris) は西曆千六百十三年六月十二日(我慶長十八年五月)我平戸に入港した舊(倫敦)東印度會社の最初の英艦クローブ號 (“Clove”) の艦長として我國に渡來した英人の航海日記である。この日記が如何に重要である乎は本書第三篇初期日英交通史の重要文献——第十七世紀初期日英交通史上の重要人物アダムス、セーリス及びゴックス等の書翰航海記及日記等の學術史的社會史的文化的及び商業史的價值第二章ジョン・セーリス (John Saris) の部特に第二節ジョン・セーリスの日本への航海記の部に書いて置いた。又第三節ジョン・セーリスとフランシス・ベーコン (Francis Bacon) との關係に就ての一節は Lord Bacon was a Member of the East India Company. Five days after he was created Lord Chancellor, he made a request for a gentleman of his bedchamber to be admitted to the freedom of the Company, and to be

allowed to adventure 1,000 l. など一節を Calendar of State Papers, Colonial Series, East Indies, China and Japan, 1617—1621. の序文 (Preface) の LXX 中に見出したる事により一層興味深くなつた。(本書初版自序文第二頁及第三頁参照)

セーリスの日本への航海記を出版した我エルネストサトウ氏は果して私が指摘したベーコンが a Member of the East India Company でありし事實を知り居られし乎。又セーリスの日本航海記の Sir Francis Bacon への献呈手稿 (The First Voyage of the English to Island of Japan, 1611—13. Original M. S. Account Written by Capt. Saris, Chief-in-Command, and Presented by Him to Sir Francis Bacon 1617) が後年我東洋文庫の所蔵に歸した〔本書第二編日英交通史料(一)の(1)参照〕事を我サトウ氏の靈に告げたい様な氣もする。又私はエルネストサトウ氏が我國に駐日英國公使として在住中も又英國に隱退中も遂に御會ひし教を仰ぐ機會を得なかつた事を返すべくも残念に思ふ。〔拙著英文日英小史自序文 (A Short History of Anglo-Japanese Relations by Chozo Muto, Tokyo. 1936. Preface) 参照〕

前述した初期日英交通史の重要文献としてサトウ氏が編纂したセーリスの日本への航海記の外にサトウ氏の著述中日英研究上重要なものとして第二に掲ぐべきは『日本に於ける外交官』(A Diplomat in Japan) である。この書に就て私は既に緒論中にも一寸引用して置いたが今茲に本論中第一節としてサトウ氏に就て述べるに當りこの著述をば日英交通史料の一つとして私は本書第二編

日英交通史料中(1)日英交通史料(一) Bibliography of Anglo-Japanese Relations (I) の終の部分(44)に A Diplomat in Japan by Sir Ernest Satow, London 1921. として掲げて置いた。これはサトウ氏が晩年に出版されたものであるが彼が年若き頃來朝して外交官として活躍した頃の記事を以て満たされて居る。これを讀めば傳自身幕末及び明治時代日英交通史上の重要人物で且つ彼の著した此書が幕末及び明治時代の日英交通史料として重要な事を了解する事が出来る。

(附註) サトウ氏著「日本に於ける一外交官」中の挿繪の一である Interior of a Japanese Battery after the Landing of the Allied Forces. と相照應する繪は世外井上公傳第一巻に掲ぐる列國兵下關砲臺占領の圖(油繪)元治元年八月井上侯爵家所藏のものである、但し他の繪圖即ち外艦下關砲擊の圖(元治元年八月)は其所藏者井上侯爵家所藏とあるは誤で予の所藏である。

サトウ氏 (Sir Ernest Mason Satow) の他の著述中日英交通史料として私は本書第二編日英交通史料 (VI) 日英交通史料(四) Bibliography of Anglo-Japanese Relations (IV) 中 (186) Sir Ernest Mason Satow—The Far East. (1815—71) (2) Japan (The Cambridge Modern History, Vol. XI: The Growth of Nationalities, Chapter XVIII) を掲げた。此論稿中日英交通史に關係あるは British Admiral's Treaty, p. 830. Night Attack on the British Legation, p. 842. Shimadzu Saburo's Mission to Yedo, Richardson Killed, p. 845. 等の部分である。その事は本書第二編日英交通史料中 (XVI) 日英交通史料(十六) Bibliography of Anglo-Japanese Relations (XVI) (293) として重複して掲げて置いた。又この日英交通史料(十六)中 (288) A Diplomat in Japan By The Right

Hon. Sir Ernest Satow, London 1921. は既に日英交通史料(一)の(4)として掲げたものを見落して重複して再録したものである。故に削除すべきである。

Sir Ernest Satow 著日本に於ける一外交官(A Diplomat in Japan)第二十二章(Chapter XXII)土佐及長崎(Tosa and Nagasaki)には慶應三年長崎に於ける英艦「イカルス」號水兵殺害事件に就て土佐藩の海援隊(Kaiyentai, a sort of local navy league)が嫌疑を受けた事が書いてあり、サトウと共に土佐に赴いた平山圖書頭の外に土佐より同船で長崎に赴いた土佐の目附(The Tosa Metsuke)の役にあつた佐々木三四郎(Sasaki Sanshiro)即ち後年の侯爵佐々木高行氏の回顧談である。勤王秘史佐々木老侯昔日談と對照して讀むと佐々木老侯昔日談は津田義磨なる人が侯の談話を筆録したものであるが、サトウ氏(Satow)の著述日本に於ける一外交官は詞氏自ら書いたもので私は史料として價值比較的高きものと信ずる。佐々木老侯昔日談には『夕方(下關)を出帆して翌十五日午後五時頃長崎に入港した』云々と書いてあるがサトウ氏の自著『日本に於ける一外交官』(A Diplomat in Japan)には次の如く書いてある。

Passing through Shimonoseki, I went on shore to ask after old friends, and found Inouye Bunda, who was a perfect sink of tacturnity.....Towards evening we set forth again in the same leisurely fashion, and reached Nagasaki on the 12th September late in the afternoon. Here I put up with Marcus Flowers, the Consul. At dinner that evening I met for the first time the well-known Kido Junichirō, otherwise Katsura Kogorō, who

came to the Consulate together with Itō Shunsuké, whom I had known since 1864....(同書 p.271 書参照)

私はサトウの記する處が史料として價值高きを信ずる。この英艦水兵殺害事件以外サトウ氏と木戸準一郎(桂小五郎)孝允と伊藤博文等との關係を知る事が出来る。又サトウ氏は英艦水兵殺害事件に就て犯人探索方法に就てサトウ氏の立案したる詳細を其著述『日本に於ける一外交官』により知り愈々史料として價值高きを感じるものである。但しサトウ氏の記する處は眞の犯人が福岡藩士金子才吉であつた事は書いてない。

この事件に就て西曆千八百六十八年六月二十三日横濱英國公使館よりパークス公使 (Harry S. Parkes) の發したる外交文書はよく事件に關する英國側の最初の主張を示して居るから茲に其外交文書の寫眞を示す事とした。この文書は既に大日本外交文書第一卷第一册第七百六十四頁以下七百六十七頁に引用されて居る。

又それに先立ち明治元年閏四月二十三日(六月十三日)英吉利公使館書記官 A. Bertram Milford より外國官知事伊達宗城宛宛長崎に於ける英國軍艦水夫殺害事件に關する處置照會の件に就ての書簡も寫眞を茲に示す事とした。

さて又前述のサトウ氏著『日本に於ける一外交官』にはサトウ氏の外に年若きミットフォード氏 (Milford) 其他と大阪にて撮つた寫眞が載せてある。しかし私は其寫眞又 Sir Ernest Satow 1869 及 Sir

Ernest S. 1903 は同書に譲り Mitford 氏がリーヅデール卿 (Lord Redesdale) として老年の寫眞を此論文に附して示す事とした。それは Further Memories by Lord Redesdale の巻頭に掲げられた寫眞の複寫である。

前に述べし如く外國總奉行平山圖書頭はサトウと同じく英國軍艦「イカルス號」(H. M. S. "Iarus" エカルスと書いてあるものがある) 永兵殺害事件取調の爲め先づ土佐に赴き次で土佐より長崎に出張したのではあるが平山圖書頭はサトウと同船したのではない。平山圖書頭、大目付戸川伊豆守御目付設樂岩次郎を差添へ其一行は幕府の軍艦回天丸 [The Tycoon's War Steamer "Eagle" (Kaiken Maru)] に搭じて兵庫より土佐に向ひ須崎より上陸高知に赴き山内容堂公に謁して須崎に歸りしに英國公使パークス氏 (Harry S. Parkes) もサトウ氏 (Ernest Mason Satow) を伴ひ英艦 "Basilisk" にて土佐の須崎港の外部に碇を投じて居つたのであつた。[A Diplomat in Japan by Sir Ernest Satow, Chapter XXI Ozaka and Tokushima, p. 264. Chapter XXII Tosa and Nagasaki, p. 265 の部分、並に雜誌江戸第四卷第二號所載英國軍艦エカルス水兵殺害事件(其一等参照)]

話は前後するが佐々木三四郎は薩藩の西郷に依頼し三國丸と稱する薩藩の船を借りて土佐に歸り居りしに間もなく平山圖書頭の乗つて來た幕府の軍艦もパークス、サトウ等の乗つて來た英船も次で土佐に來たのであつた。即ち佐々木三四郎も平山圖書頭もパークス、サトウ氏等も夫々別の船

で土佐に赴いたのであつた。

パークスは本來自分とサトウの乗る英艦に佐々木三四郎をも乗せて土佐に赴く考へであつたが佐々木三四郎は同船を好まず一足先きに薩藩の船を借用して土佐に歸つたのである。其始末は勤王祕史佐々木老侯昔日談に詳述してある。

サトウはパークスと土佐にて別れサトウのみ "Shooeyleen" なる蒸汽船で土佐より長崎に赴いたのであつた。

平山圖書頭は大阪まではパークス公使と同伴したと佐々木老侯昔日談に書いてある。

サトウ氏著「日本に於ける一外交官」には「イカルス」號水兵殺害者が土佐藩士でなく筑前人であつた事が千八百六十七年八月發見されたと書いてある。

Information had arrived that the murderers of the two sailors of H. M. S. "Iarus" in August 1867 had been discovered; they were from Chikuzen and the party to which they belonged was said to number nine in all. This of course would be welcome news to the Tosa people. It was strange that retainers of Chikuzen, who entered tained Admiral King so hospitably in January should have been guilty of such a wanton crime (A Diplomat in Japan. By Sir Ernest Satow, Chapter XXXIII: Capture of Wakamatsu and Entry of the Mikado into Yedo, p. 393)

即ち福岡藩士金子才吉が英國水兵二名を殺害した事は書いてない、殺害者が一人でない様に書いてある。これは金子才吉の事が未だよく知れなかつた當時の日記に基いて書いたものであるまい乎。この點は史料的價值が高くない。

(附註) 平山圖書頭の事は雜誌「江戸」第八卷第一級(第貳拾九號)所載幕府參政平山圖書頭としての平山省齋翁と維新當時の其文章に幕府參政平山圖書頭(致任省齋)眞影と題した故平山成信氏所藏の寫眞が掲げてある。私は故男爵平山成信氏より平山圖書頭に宛てたるサトウ氏の日本文の書簡の寫眞を贈られた事がある。又故平山男爵はサトウ氏著「日本に於ける一外交官」中平山圖書頭に關する記事に興味を持つ事を私に語られた事を記憶する、今サトウ氏に就てこの論文を草するに當り故平山男爵を憶ふものである。

サトウ氏の著述「日本に於ける一外交官」は The Rt. Hon. Sir Ernest Satow, A Memoir by Bernard M. Allen に記する如く An account of his early years in that country であるがサトウ氏は同じ著者が説明せし如く “A Guide to Diplomatic Practice”, a work which quickly took rank as the authoritative book on the subject を著した。これは千九百十七年倫敦より Contributions to International Law and Diplomacy edited by L. Oppenheim. の一つとして出版されたものである。

右著述はサトウ氏が學者的外交官たる事を示すもので外交官として専門の著述ではあるが日英交通史には關係がないから本書には掲げて置かなかつた。

次に私が日英交通史料(四)⁽¹⁸⁶⁾として掲げた Sir Ernest Satow—The Far East. (1815—81) (2) Japan (The

Cambridge Modern History, vol. XI: The Growth of Nationalities. Chapter XXVIII は短篇ではあるが歴史家としてサトウ氏が英本國の學者間に認められた事を示すものではあるまい乎。其意味に於てこのケンブリイチ近世史中に彼が寄稿した事は大に意味があると私は思ふ。氏は牛津大學の honorary D. C. L. となりケンブリイチ大學の honorary LL. D. となつた。

私は本書初版第二篇日英交通史料中(XVI)日英交通史料(十六)の内⁽²⁹³⁾として重複してこのサトウ氏の執筆した日本(Japan)を掲げたのは削るべきであるが其説明中に述べて置いた如く此論稿中日英交通史に關係あるは British Admiral's Treaty, p. 830. Night Attack on the British Legation, p. 842. Shimadzu's Mission to Yedo, Richardson Killed, p. 845. 等の部分である。

私が本書日英交通史料(四)⁽¹⁸⁸⁾ Satow, Sir E. Japan 1853—64 or Genji Yume Monogatari or Kaikoku-Shidan (Yokohama, 1873, 2ed. with Supplementary Notes by S. Watanabe, Tokyo, 1906) (Sir Ernest Satow, A Memoir by B. M. Allen 卷末 Appendix には東京出版を 1905 と記す)と書いて置いたが私の所藏する英文開國史談即ち Japan 1853—1864, or Genji Yume Monogatari, Translated by Sir Ernest Mason Satow, Tokyo. (XXXVIII of Meiji) (1905)によれば東京出版を 1905 とするのが正しい。

次に日英交通史料(四)⁽¹⁸⁹⁾ サトウ氏著英國策論(橫濱慶應三年) Japan Times に寄稿せる論文を著者 E. Satow 氏が自ら和譯して出版したものであると書いて置いたこの英國策論を私は一冊藏して居

る(新舊時代第二年)
第一册参照)

これ亦著者サトウ氏が日英交通史上の重要な一外交官で又日英交通史の参考文献に寄與した人であり又日本語學者であつた事を示すものである。(明治文化研究、新舊時代、大正十五年)四月及五月號所載吉野作造氏の文参照)更に日英交通史料(四)に(190)として掲げた文學博士新村出氏著薩道先生景仰錄(昭和四年十一月十日ごろりあそさえて發行)は昭和四年(千九百二十九年)八月二十六日八十六歳の高齡を以て祖國たる英國の Otery St. Mary の Beaumont にて永眠した故 Sir Ernest Satow 先生を懷慕し主として其の吉利支丹研究史上の回顧を目的としたものではあるが日英交通史の事も論じてあるから私は日英交通史料(四)中に加へて置いたのであるが今茲にもこの事を一言して置く。

サトウ先生著述目録に就ては池田榮三郎氏吉野作造兩氏共著のもの大正十五年十二月五日發行響醒社書店發行明治文化研究會編『日本耶穌會刊行書志』(The Jesuit Mission Press in Japan. 1591—1610)解説中に掲載されて居る。これは實により出版をなされたものである。吉野博士は今故人となられ出版社響醒社書店も今其存在を知らないが誠により出版をなしたものである。私は謹んで其功績を賞揚したい。

尤もサトウ氏の著作目録は其後出版の The Rt. Hon. Sir Ernest Satow, A Memoir by B. M. Allen の巻末附録に掲げられてある事前述の通である。

學者の學術的業績はたゞ其著述のみによりはかるべきではなく其學者が蒐集し得た書籍資料をも斟酌すべきである。

サトウ氏は珍籍名著又は史料をも蒐集されたと傳へられて居る。Bernard M. Allen 氏著 The Rt. Hon. Sir Ernest Satow G. C. M. G. A Memoir of II. Scholar and Diplomat の部に曰く、

Satow's love of study was evidently still one of his dominant characteristics, and even during these critical years he found time for writing articles about Ancient Japan. He once wrote to his sister: "A bookworm I was born and must remain to the end of my days." The following entry in the Baroness's diary perhaps bears out this remark:

"November 7th, 1895. We dined at the British Legation..... It was a very pleasant dinner. Sir Ernest Satow showed me his library. He possesses a delightful collection of interesting books and wonderful editions. One of the best rooms in the Legation is devoted to this object."

大正十三年四月長崎にて其記念祭を舉行したシーボルト先生渡來百年記念會にて求めたシーボルト先生の大著はエルネスト・メーソン・サトウ(Ernest Mason Satow)の藏書票のあるものであつた。今は長崎縣立圖書館に保藏されて居る。

又私が長崎高等商業學校の爲め買求めた Acht Monate in Japan nach Abschluss des Vertrages von Kanagawa

von Fr. Aug. Lühdorf, Bremen, 1857, 15'

Ernest Mason Satow

Yedo

なる蔵書票が貼附してある。

本書第二編日英交通史料中(VIII)日英交通史料(八)Bibliography of Anglo-Japanese Relations (VIII)には(238)故エルネスト・サトウ氏蔵書中のAfschrift van enige briefjes betreffende het gebeurde met het Engelsch oologs fregat Phaeton Kapitein Fleetwood Pellow in de baai Nagasaki in October 1808なる寫本を史料として加へた。これは英譯すればCopies of some Letters concerning what happened to the English Man of War Phaeton, Captain Fleetwood Pellow, in the bay of Nagasaki, October 1808.なる英艦フェートン號事件の文書の寫である。それは同氏永眠後我國に輸入され神戸のトムソン商會が持つて居つたのを私は間接にC. R. Boxer君より借覽して寫した。サトウ氏(Ernest Satow)の筆寫されたものは其後米國の或圖書館にて買取られた。

故サトウ氏はハーグの國立古文書館にて筆寫されたものである。かく英艦フェートン號事件關係文書は和蘭首府ハーグ古文書館に保管されて居る。それ等を和蘭に留學して觀られた東京商科大学教授文學博士幸田成友氏が其文書中英艦長和蘭商館員の往復書翰等を撮影して持ち歸られた。

私は其等を拜見し同博士より私が借用して更に複寫したるものに基づき同博士の承認を得て其數葉を世に公表したのが日英交通史料(八)のはじめに掲げてある。

第二節 W.G.アストン (William George Aston) (1841—1911)

アストン氏はアイルランドのThe Queen's University (Queen's College)のMAとなり我元治元年(西曆千八百六十四年)日本語通譯生(Student Interpreter in Japan)に撰ばれて來朝した。千八百六十九年五月十一日3rd Assistantとなり千八百六十九年七月八日2nd Assistantに進み千八百七十年十月六日には駐日英國公使館通譯及翻譯官(Interpreter and Translator to the Legation at Yedo) (TokyoとせずYedoと書いてある)となり千八百七十五年四月一日より八十二年四月一日まで日本書記官補 (Assistant Japanese Secretary)となり長崎駐在英國領事(Consul at Nagasaki)に撰ばれ千八百八十年二月十日より千八百八十一年十二月二十三日まで兵庫駐在英國代理領事 (Acting Consul at Hiogo)となり又千八百八十二年一月五日より六月二日まで及千八百八十二年七月十四日より同年八月七日まで更に又千八百八十二年十月二十七日より千八百八十三年二月二十八日まで及六月二十一日より十月五日まで其職にあつた。

次に千八百八十四年三月十七日朝鮮駐在英國總領事 (Consul-General for Corea)となり千八百八十六年五月二十日東京駐在英國公使館日本書記官 (Japanese Secretary at Tokio)に任ぜられ千八百八十七

Proposed Arrangement of Korean Alphabet
Korean Popular Literature
Korean Märchen

等の研究論文を寄せられた。

アストン氏が日英交通史の研究に對する貢獻は H. M. S. "Phaeton" at Nagasaki in 1808. By W. G. Aston Trans. Asiatic Soc. Japan, VII, Pt. IV 1879, pp. 323—338) の如き日英交通史上の重要事件たる英艦フェートン號の長崎侵入事件に關する日本側の古記録を見出し、それを英語に翻譯して學界に紹介した事にある。本書第一編日英交通史概観第十五章英艦フェートン號の長崎港侵入附註一、參照。

尙前述の本書第一編日英交通史概観第十五章英艦フェートン號の長崎港侵入附註二、日本亞細亞協會第七卷所載 H. M. S. "Phaeton" at Nagasaki in 1808 by W. G. Aston とある部分の外に同じく本書第二編日英交通史料(1)日英交通史料一) Bibliography of Anglo-Japanese Relations (I (39) としてアストン氏の同じ論文を紹介して置いた通りこの論文は文化五年八月十五日(西曆千八百〇八年十月四日)のフェートン號長崎港侵入事件を取扱つたもので、この論文のはじめに次の如く書き起してある。

"History of the Outrage by Anglians at Nagasaki" such was the title which caught my eye as I was one day turning over the volumes on a book-stall in a back street of the city of Yedo. A few tempus placed me in

possession of a little manuscript book which, on examination proved to be a copy of the official diary kept in the Government House at Nagasaki during a visit made to that port by H. M. S. "Phaeton" in the year 1808. Of this volume the following narrative is a faithful résumé:—

アストン氏は幸に日英交通史上の重大事件たるフェートン號事件の根本的史料に觸目し實によくこれを學會に紹介したものである。これ實に彼の日英交通史の研究に關する一大貢獻である。

このフェートン號事件に就ては本書第二編日英交通史料(VI)日英交通史料(六)Bibliography of Anglo-Japanese Relations (VI) には長崎市役所所藏のフェートン號の艦海記其他を掲げ(VII)日英交通史料七) には英艦フェートン號の繪圖の外に丹治舉直著崎陽口録を掲げて置いた。若しこれをアストン氏が英譯されたならば一層有益であつたと思ふ。

(附註) The Travel Bulletin published monthly by N. Y. K. Line, No. 133, 及 No. 134 所載 Kiyo Nichiroku, From the Nagasaki Diary by Tanji Kyochoku on the Coming of H. M. S. "Phaeton" in 1808. 參照

尙仙臺、東北帝國大學附屬圖書館所藏(文學博士狩野亨吉氏舊所藏の所謂狩野文庫)『文化五辰年八月十五日肥前國長崎沖江渡來仕候エケレス船之形』なる繪圖を昭和十年夏休暇に私は拜見して直ちにそれが英艦フェートン號の繪圖なる事を斷定し寫眞に撮影を依頼し其寫眞を先づ我校三十周年記念繪葉書中に加へ、次で前述の The Travel Bulletin No. 133 及 No. 134 に掲げ、次で本書初版學生版の表紙に載せた。茲に更に其一つの參考までに掲載する事とした。

この繪圖は私が昭和六年五月十六日子爵松平定晴氏(白川樂翁公の後裔、舊桑名藩主松平家當主)所藏樂翁公遺品中より發見したフエートン號の繪圖と同一種のものである。
松平子爵家所藏の繪圖は前述の如く本書中に掲げて置いた。

尙フエートン號事件の史料は(IX)日英交通史料(九) Bibliography of Anglo-Japanese Relations (IX)中に鍋島侯爵所藏のものを掲げ(X)日英交通史料(十)に練早家及び大村家所藏の文書中の史料を掲げ最後に(XI)日英交通史料(十一)には大村家文書及古賀穀堂日乗抄録フエートン號事件に就ての記事を掲げた。これ等は若し故サトウ氏及び故アストン氏等今尙生存されて居つたならば見せ度思ふ史料である。兩氏共に既に故人となられ又私は兩氏生前に共に面識なかりし事を遺憾に思ふ。

第二節のはじめに掲げた W. G. Aston の小傳は The Foreign Office List and Diplomatic and Consular Hand Book 1893, p. 57. Aston, William George, C. M. G. の部を主として Who's Who 1909 等参照して綴つたものである。しかし W. G. Aston 氏が was made a 3rd Assistant, May 11, 1869; a 2nd Assistant, July 8, 1869, ... と The Foreign Office List and Diplomatic and Consular Hand Book 1893. に書いてあるのは疑はしく思ふ。

それは千八百六十八年(千八百六十七年とあれどそれは誤記ならむ)正月大阪より英國公使パークス氏が發したる長崎駐在英國領事宛の書翰に Mr. W. G. Aston を Third Assistant and Interpreter on the Japan Consular Establishment に昇進の報知を W. G. アストン宛の封入書簡と共に發して居る。一ヶ年に四百磅の俸給 (The collective rate of four hundred pounds a year) を此の日より支給すべしと書送つて居るの

は長崎駐在の英國領事館の古文書中私は確に見た事により其パークスの書翰の方が史料的价值高くその方を信すべきである。但し Jan. 1868 とすべきを Jan. 1867 として 1868 年度文書の綴込中にあるのは年のはじめに誤つて舊年を書く事はありうると思ふ。

アストンの名は長崎に於ける英國軍艦イカルス號水夫殺害事件に於て外國官判事大隈八太郎と英吉利領事との應接記(明治元年十一月十一日應接)に英通辯官アストンとして現はれて居る。即ち W. G. Aston は Third Assistant and Interpreter であつたのである。又彼は銅貿易(Copper Trade)に就て長崎在勤中覺書(Memorandum)を書いて居るのを私は英國領事館の古文書中に見た。筆蹟はアストンの筆蹟である。其大要は Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days 1603—1868. Chapter IX: Trade under The Shoguns, p. 198. に紹介されて居る。

第三節 A. B. F. ミットホルド (Algernon Bertram Freeman Mitford) 後年リーズデール卿 (Lord Redesdale) (1837—1916)

ミットホルドは Eton より牛津大學 Christ Church に入り Slade, Boulter 及 Fell 獎學金 (Exhibitions) を得千八百五十七年 the first public Examination にて古典文學古典語二等賞を得た。彼は牛津大學にて マックス・ミュラー教授 (Prof. Max Müller) の講義は聴かなつたが同教授を尊敬して居つた。外務省採用試験に通過して Junior Clerk として千八百五十八年三月より外務省に出仕して千八百五十九年

一月二十九日まで在勤し千八百六十三年十一月十一日より千八百六十四年五月まで St. Petersburg 駐在の英國大使館に臨時的に在勤し千八百六十三年十一月二十三日三等書記官代理 (Acting 3rd Secretary) として採用せられ千八百六十五年二月七日臨時北京公使館附 (temporarily attached to the Mission at Peking) となり千八百六十六年十月十六日より千八百六十八年三月七日まで日本江戸駐在英國公使館附となり二等書記官 (2nd Secretary) に採用せられ千八百七十一年七月一日露國 St. Petersburg に轉勤を命ぜられたけれども赴任せずして千八百七十一年八月五日退職した。

千八百九十二年七月 Stratford Division of Warwick 選出の下院衆議院議員となつた。

彼は年若くして露西亞文學に親しみ又文學、藝術、宗教等に興味を持つたものゝ如くである。晩年伊太利文學、ダンテに傾倒した。語學、文學、宗教等に對する趣味は Satow 氏、Aston 氏も共通であつた如くである。サトウ、アストン兩氏は年若く Herbert Spencer の影響を受けた如くであるが Allen 氏の記する處によればサトウ氏は晩年キリスト教の信仰に生きたとの事である。これは注意すべき點である。(The Jesuit Mission Press in Japan 1591—1610, by Ernest Mason Satow はサトウ氏をしてキリスト教に對する興味を起さしめた)

ミットホルドの著述は Tales of Old Japan, By A. B. Mitford, Second Secretary to the British Legation in Japan, In Two Volumes, London 1871 (私は Northbrook なる蔵書票ある本を我校の爲めに求めた) □新版は by

Lord Redestale, London 1919 とあるをばじめとして The Bamboo Garden, London 1896; The Attaché at Peking, London 1930; The Garter Mission to Japan, 1936; Further Memories, by Lord Redestale, G. C. V. O., K. C. B. With an Introduction by Edmund Cosse, C. B. London, 1917. 等がある。(又 Will. Adams に就て Three hundred years ago と題し Japan Society's Transactions, Vol. VIII 1 Lord Redestale の講演が掲載されて居る)

三人の内で纏つた著述は最も少ないが彼は學生時代より學才の優れた人である。

ミットホルドの事は日本史籍協會發行 明治 局外中立顛末卷二卷一慶應四年三月十七日の條に英士官ミツスホルトとある。又卷二九横濱處置に付東久世通禧等京都へ言上書 明治元年 三月十七日 辰 ミツスホルトと書いてある。

木戸孝允日記第三(明治九年十二月十八日)に「英公使館に至りアーストンに面會云々と書いてある。(日本史籍協會發行木戸孝允日記第三第四百六十五頁参照) (アーストンとあるは英語發音に近し) 明治元年閏四月二十三日(六月十三日)英吉利公使館書記官 A. Bertram Mitford より外國官知事伊達宗城 (The Prince of Uwajima) 宛長崎ニ於ケル英國軍艦水夫殺害事件ニ關スル處置照會ノ件に就ての書簡は寫眞を以て示す事とした。

明治元年閏四月二十三日(六月十三日)外國官知事伊達宗城 (The Prince of Uwajima) より英吉利

□これは1872年 Governors-General and Viceroy であつた。Baron (Earl of) Northbrook の舊蔵書であると思ふ。

公使館書記官ミットホルド (Mitford) 宛の短文の書翰が大日本外交文書第一卷第一冊第七百三掲げてある内容は『長崎ニ於ケル英國軍艦水夫殺害事件ハ調査急速ニ運ヒ難キ旨回答ノ件』である。それに對して同日英吉利公使館書記官ミットホルド氏 (Mitford) より外國官知事伊達宗城の返書(長崎ニ於ケル英國軍艦水夫殺害事件調査急速ニ運ヒ難キ旨英國公使館へ傳達ノ件)も大日本外交文書第一卷第一冊に掲げてある。(第七百三十三頁参照)

西歴千八百六十九年(明治二年)に英國 Queen Victoria (1819-1901) の王子 Alfred, Duke of Edinburgh (1844-1930) が我國に御來遊になつた。Duke of Edinburgh は Queen Victoria の皇太子即ち後のエドワード七世 (King Edward VII) (1841-1910) より三歳下の弟君であられた。

さて其 Duke of Edinburgh の日本御來遊の折の覺書 (Memorandum) を當時日本に在勤のミットホルド氏 (Mitford) が書いて居る。(大日本外交文書第二卷第二冊には日本側の史料の外にこの覺書の原文を引用す。)

英國皇國エドワード七世陛下 (King Edward VII) より 明治天皇陛下へのガーター勳章御贈呈使節 (Garter Mission) として千九百六年コンノート殿下 (Prince Arthur of Connaught) 首席隨行員として Lord Redesdale (ミットホルド氏) は加はつて來朝した。其詳細は本書第一編日英交通史概観第十九章明治大正昭和時代日英交通史上の諸項目(日英皇室關係)第二篇日英交通史料(II)日英交通史料(二)のうち(八)日英皇室關係史料等参照。

その内にも引用して置いた如く King Edward VII. A Biography by Sir Sidney Lee, Vol. II: The Reign 22nd January 1901 to 6th May 1910 の p. 312 に次の如く書いてある。

Early in 1906 the King's nephew, Prince Arthur of Connaught, who had been commissioned by the King to invest the Emperor of Japan with the Order of the Garter, left London for Japan with Lord Redesdale, Admiral Sir Edward Seymour, General Sir T. Kelly-Kenny, and Sir Arthur Davidson, all personal friends of the King. The King had made careful choice of the members of the mission some months earlier, and wrote the list out in his own hand.

以上引用せし一節より察するも如何に Lord Redesdale がエドワード七世の御親任厚かりし乎が窺はれる。而して明治時代日英御皇室の御親善に Lord Redesdale が寄與貢獻した事は察する事が出来るのであるまいか。

明治天皇の御事蹟・御性格・其他詳細に其著 The Garter Mission to Japan 中に Lord Redesdale は謹んで記述申上げて居る。而してそれは幕末明治維新當時より我國に渡來せし三人の外交官中最も後に渡來せしとは云へ維新當時よりの回顧談を混へての彼の著述 The Garter Mission to Japan は史的興味深きものがある。

The day was fixed, and we all went up to Kyoto. The British Legation took up its abode in the beautiful

temple of Chion-in. The next morning Sir Harry Parkes, with Mr. Satow (now Sir Ernest) and myself, set out for the Goshō Sama, the Imperial Palace. . . .

(The Garter Mission to Japan by Lord Redesdale, p. 106)

右の如く Lord Redesdale はガーターミッションの首席随員として大任を帯びつゝ、ミットホルド (Mitford) としての青年時代の回顧にふけられたものと察せらるゝ。

私が明治聖徳記念學會の清囑に酬ゆる爲めに幕末明治時代の三外交官としてサトウ、アストン及びミットホルドの三人を撰び日英交通史上の人物として彼等を論じ又日英交通史に關する参考文献として彼等の著述に就て述べた主旨も明にする事が幾分出來たかと思ふ。依而不充分ながら此邊にて筆を擱く事とする。

追 録

Further Memories by Lord Redesdale 卷頭の Edmund Gosse の序文中に Lord Redesdale より Edmund Gosse 宛の書簡の次の一節が引用してある。

"No praise can be too high for the work which Satow did in the early days of our intercourse with Japan. He was a valuable asset to England, and to Sir Harry Parkes, who, with all his energy and force of character, would never have succeeded as he did without Satow, Aston was another very strong man."

右の一節は實によく Lord Redesdale 即ち Mitford 氏が如何に Sir Ernest Mason Satow 氏の日英交通史上の功績を稱揚しそれを承認した乎を示すものでサトウ氏の強き性格をも説き、且つ Aston 亦意思の強き人なりし事を明にして居る。

私は此論文を結ぶに當り右一節を引用する事を禁じ難い。又 Lord Redesdale が牛津大學在學中 Max Müller 教授の印象を次の如く書いて居る。それを引用したい。

I first met Max Müller sixty years ago at the Denney at Christ Church, where the evening parties were gatherings of all that was most distinguished in University life. He was then a most attractive personality, brilliant, of course, still young, not very tall, but extremely good looking, an accomplished musician, the friend of Mendelssohn. His conversation was delightfully illuminating, and he was generous enough not to grudge the enjoyment of it to a humble undergraduate who was only too ready to sit at his feet. It was a regret to me that I left Oxford to enter the Foreign Office without having had the chance of attending his lectures; but his works on the Science of Language, and especially his "Chips from a German workshop," written at the behest of the great Bunsen, who persuaded the directors of the Old East India Company on public grounds to defray the expense of his edition of the Vedas, have been to me the joy of many years, and still continue to fill many an idle moment, robbing it of its idleness, for who could be idle with Max Müller? (Further Memories by Lord Redesdale, p. 54)

右一節は牛津大學に於ける Max Müller 教授の感化の偉大なりし事を示し其感化が英國の外交官の精神的教養に及ぼしし影響を悟らしめる。

① Chips from a German Workshop. By Max Müller, vol. I. 卷頭 Baron Bunsen への獻詞並に Preface 参照。

次に又私は本文中に Satow 氏の人生觀宗教觀の變化に就て一言せし處を敷衍する爲に B. M. Allen 氏著 Sir Ernest Satow 中 II 學者及外交官 (Scholar and Diplomat) として同氏に就て論ぜし一節を左に引用して置く。

But the most important event connected with this period of leave was that it marked a turning point in Satow's inner life. He had for some time been dissatisfied with the Materialistic Philosophy which he had adopted when as a young man he was attracted by Herbert Spencer. While in Japan, he had been much interested in studying the history of the Jesuit movement in that country, and he now followed up his studies of that movement by paying visits during the winter of 1887—8 to Italy, Spain and Portugal and unearthing at the different libraries books that had been issued by the Jesuit press in Japan and of which he published a complete account in a beautiful monograph. On his return to England he was one day reading in a library at Oxford when he happened to take up a Latin edition of Thomas à Kempis's Imitation of Christ and, as he opened the first page, his eyes fell upon the following words: "qui sequitur me non ambulat in tenebris sed habebit lumen vitae" ("He that followeth me walketh not in darkness, but shall have the light of life.") These words produced a deep and instantaneous impression upon him and this experience was followed not long after by a sudden realization, in a journey across the beautiful midland country, of the glory of the created world and the reality of God's existence. A few weeks later (October 29th, 1888) he was confirmed at St. Paul's Cathedral by the Bishop of London and from that time forward religion became the master-power in his life. To the outward eye he may not have shown much noticeable change, but, to those who knew him, his character in his later years was marked by a depth and strength which it had not known before.

大正十三年十二月七日大日本文明協會發行明治文化發祥記念誌收錄明治文化回顧錄中渡邊修二

郎氏稿

明治前後日本の事情に精通し國交及學界に功勞ありしアーネスト・サトウ氏 岩波西洋人名辭典にも參照

サトウ氏の著述 Notes on the Intercourse between Japan and Siam in the Seventeenth Century. Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. XII. Yokohama 1885. は本書第二編日英交通史料(III)日英交通史料(三)の中(116)に加へて置いた。蓋し日英交通史の研究をなすには日本と暹羅との交通史に於ても併せて研究する必要があるからである。宮内省藏明治二十九年發行寺崎遜氏譯山田長政事蹟考原名第十七世紀中日本暹羅交通考はサトウ氏論文の邦譯である。この論文はサトウ氏(Satow)が Agent and Consul-General at Bangkok 時代の勞作である。彼が日本の對外交通史上の研究上の一貢獻である。(The Rt. Hon. Sir Ernest Satow; A Memoir by Bernard A. Allen. II: Scholar and Diplomat, pp. 86—90)

尙私が本文中アストン氏と Herbert Spencer の關係をも一言したのは Shinto (The Way of the Gods) に屢々 Herbert Spencer の學説が引用されて居るからであつて必ずしもアストン氏の人生觀が Spencer の影響を受けて居ると云ふのではない。誤解なきを望む。私はアストン氏の人生觀を究めたものではない。

小笠原長生子傳東郷平八郎全集第二卷掲載の寫眞(49圖)中明治二十九年英國コンノート殿下ガーターミツションにて御來朝の折鹿兒島に御立寄の際西郷南洲翁墓前撮影の説明中「前列白髮の人がシームア元帥」とあるは誤にて白髮横顔を寫し居る人はリ

ステート卿 (Lord Redesdale) 也。尙古集成館にある同一寫眞の説明は正し。但し此等寫眞と In Togo's Country. By Henry B. Schwarz 著 Togo's Country 所載寫眞 The Garter Mission at Saigo's Grave との關係は予には疑問あり。予は Henry B. Schwarz 著 In Togo's Country 所載の寫眞が原寫眞にて其中首要人物以外を省略したるものが西郷南洲翁記念館、尙古集成館東郷平八郎全集等にある南洲翁墓前記念寫眞也と信す。財團法人明治神宮奉養會刊行聖徳記念館繪畫館壁畫集「乾」四六條改正會議にサトウの肖像も描かれてある。同一の繪畫の寫は井上公傳にも轉載してある。

昭和十三年七月十五日印刷
昭和十三年七月二十日發行

長崎市片淵町二丁目一八

著作兼發行者 武藤長藏

京都市下京區西洞院通七條南

印刷者 内外出版印刷株式會社